この一年

大県構想実現
力づよい足どり

まもなく暮れゆく一九七〇年。この年の県勢のうごきを一言でいえば「国体を主軸に大きくゆれ動き、大県構想実現に力づよい一歩を踏み出した年」といえよう。国体の成功が県民に植えつけた自信、広大な北上の未開発資源への挑戦開始、交通ネットワークの整備など、明るいたのもしい話題に満ちた年だった。

北上山系開発構想明らかに

一月 新春早々、明るい話題がもたらされた。長野県で開かれていた冬季国体スケート競技で、八年ぶりに天皇杯入賞（六位獲得）したのだ。県開発公社が先行取得していた十二万五千平方㍍の県流通センター用地に盛岡卸センターの設置もきまった。

二月 ひきつづき北海道で開かれた冬季国体スキー競技は、教員と壮年の活躍がめだち、県勢は執念の天皇杯得点一点を加算、岩手国体総合優勝への初光をひらいた。

大県実現めざす県政は、当初予算八百二十二億と東北きっての大型予算を編成。また政府予算獲得にも積極的意欲をみせ、大きな成果をあげた。北上山系にメドがついたほか、国立青年の家、中小企業レクリエーションセンター、サケ・マス養殖企業化試験場、米生産総合パイロットなど懸案の事業が一挙に舞いこみ関係者は喜びにわいた。北上山系開発の基本構想が明らかにされた。百六万㌶におよぶ広大な山地に事業費総額八千九百億円をつぎこみ、わが国における最高度の大規模畜産団地や林業団地、観光地づくりをやってゆこうというもの。いよいよ北上新時代の到来を告げた。東北縦貫自動車道も、水沢花巻間がまず路線発表され、ハイウェイ時代の夜明けを感じさせた。だが一方、低気圧がもたらした台湾坊主は、県南沿岸部を襲い山田町を筆頭に総額二十五億五千万円と、十勝沖地震に匹敵する大きな被害をもたらして天災融資法が適用され、西和賀地方は強風雪で交通マヒがつづいた。

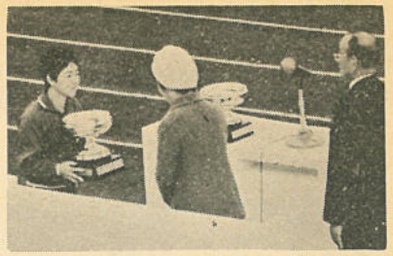
三月 一日の三陸縦貫鉄道盛線、綾里駅は、処女列車運行のよろこびにわいた。十四日からは万国博が開幕し、二十九日から始まった岩手県の日はすこぶる好評。そのごもつづいた県産ワカメのひきあい等、反響も大きかった。

四月 県警にこの月から機動警察隊が登場。従来の交通機動巡ら隊と機動そう査隊が合体。装備と陣容も新たに、広域化とスピード化の様相を高める犯罪のそう査に対処してゆくこととなった。十一日には、かねて出されていた県議会からの要請をうけて県公社等運営協議会が発足。公社等の企業性と公共性の両面からの機能発揮に、側面援助をはかることとなった。経済界では、去就が注目を集めていた釜石製鉄所が一日から新日本製鉄傘下の主力工場として装いを一新、また伊藤忠商事が金ケ崎町に三百万羽養鶏場（岩手ICファーム）を起工。県内で飼われる採卵鶏総羽数の四倍という超マンモス飼育なだけに、農業界の話題を呼んだ。農業関係ではこのほか農林省の落葉果樹研修施設が全国ただ一ヵ所、小岩井に開設、前沢町大袋地区には多回育養蚕技術パイロットが全国四ヵ所の一つに指定され、儲かる養蚕に範をたれてゆくこととなった。過疎対策では、共同畜舎や生活センターを軸に通勤農業を営む集落再編成の全国モデルとして沢内村長瀬野地区が指定。また沢内の豪雪センターに似た山村開発センターが山形村川井地区に生まれることとなった。

大型誘致企業あいつぎ着工

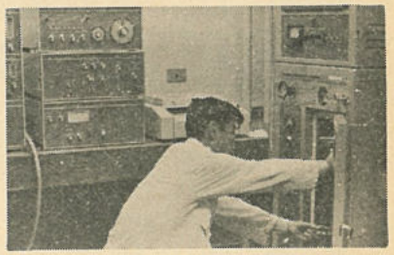
五月 ゴールデンウィークの幕は、八幡平有料道路の開業で明るく開けた。深い雪の廊下をマイカーの列がつづき、頂上は夏スキーに興ずる若者で空前のにぎわいを見せた。有料道路はこののち、北部陸中海岸道路の建設が始まり、七月には小岩井線が部分開業、九月には秋田側の八幡平線も開通し、景観を楽しむマイカーを喜こばせた。道路では主要地方道だった久慈沼宮内線、盛岡十和田線、花巻釜石線、一関気仙沼線の四路線が国道に昇格、喜びのパレードがくりひろげられた。田植時期に当り転換休耕田の見られたのも今年の特色。米の生産調整策がとられ、目標数量を二九％（面積三四％）も上まわる農家の協力がみられた。消費者保護をさけばれる折から全国七番目の消費生活センターが盛岡にオープン。三億円を投じ完成の待たれていた県営野球場や、機構も新たに盛岡専修職業訓練校、県立東和病院なども相ついで新築落成。また東北日本電気（設備投資六十億円、従業員四千人、一関）、東京製綱スチールコード（七十億、八百人、北上）、モリオカセイコー工業（十四億、千人、雫石）、大崎電機工業（十二億、千人、同）、三国工業（四・八億、三百人、滝沢）など、かってない大型企業の相つぐ進出も明るい話題となった。

六月 北上山系に開発の斧を

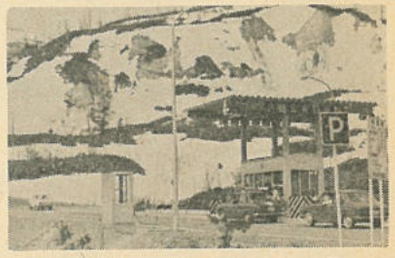


国体での総合優勝は県民に大きな自信を植えつけた（天皇杯をもらう今野安子選手）

身障スポーツ大会も県民の暖かい友情が好評だった（手話コンパニオンと大阪の選手）



公害対策は大きな社会問題となった（ガスクロ装置で有害成分を検出する県衛生研究所員）



道路舗装率の向上めざましく、県営有料道路も二路線が開通（アスピーテライン入口）

北上山系に開発の緒口が開かれた（外山で行なわれた牧草空中播種）

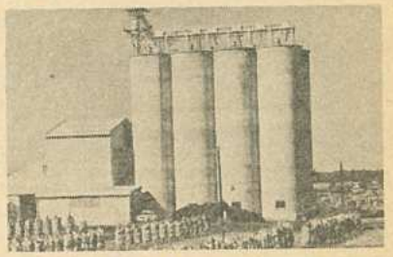
県勢

1970年県勢ビッグテン

1 岩手国体、全国身障者スポーツ大会が大成功し、国体では天皇杯を獲得。
2 北上山系開発構想すすみ、国の調査事務所設置など活発化す。
3 東北縦貫自動車道の路線確定、有料道路の開通、道路舗装の向上など、交通網整備すすむ。
4 第二次農業基本計画スタートし、畜産500億達成運動など総合農政に新機軸。
5 公害防止条例制定など公害対策すすむ。
6 時代を反映して消費生活センター、県営駐車場など新施設誕生し、松園ニュータウン、流通センター、県民会館などの建設もスタート。
7 国立青年の家、中小企業レクリエーションセンター、さけ・ます養殖企業化試験場など国の施設の着工あいつぐ。
8 気象庁のロケット観測所開所し、東京大学三陸気球観測所も着工。
9 新日本電気、第二精工舎など、大型誘致企業の立地続く。
10 三陸縦貫鉄道盛線に待望の処女列車走る。

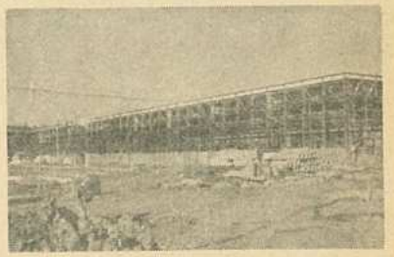
大県岩手をうたいあげるかのように気象観測ロケットの打ち上げも本格化（三陸町）

三陸縦貫鉄道盛線が開通（処女列車を郷土芸能で迎えてわきたった綾里駅）



米の問題を中心に農業は新曲面にたち向うこととなった（南都田カントリーエレベーター）

仙岩峠に大トンネル掘削が始まり、冬も日本海岸への道が通れる日は近い。



大型企業あいつぎ誘致（北上に作られた東京製綱）。

入れるべく、農林省の北上地域総合開発調査事務所が盛岡に開所。人命をむしばむ公害が大きな社会問題としてクローズアップされ、自動車の排気ガスに含まれる鉛の害もうきぼりになって県はいち早く、一日の庁議で公用車からのハイオクタンガソリン追放を決定。また新聞の社会面は列車爆発未遂や久慈の一実ちゃん事件でもちきりとなった。

公害対策本部がスタート

七月　重度身障者のための授産施設として一関ワークキャンパスが開所し、県の重要施策として心身障害者の扶養共済制度も発足。身障者とその家族に明るい話題を提供した。また六日に公害防止条例を公布した県は大気汚染、水質保全、騒音規制の三公害に地域指定方式をもりこみ、独自の規制をはかることとなった。大船渡水産事務所のニジマス海水養殖成功、試掘の完了した滝の上地区の地熱発電も松川（二万キロワット）を大幅に上まわる十万キロワット操業をめざして本格掘削を開始。県北の海の玄関、久慈新港の完工など、明るい話題がつづいた。

八月　待望の国営サケ・マス養殖企業化試験場が、山田町大沢に着工の運びとなり、松尾鉱山では三坑閉鎖工事が進んで北上川に生気よみがえり。二百十五ヘクタールの山林をきりひらいて盛岡郊外に松園ニュータウン建設もスタート。新水源池完成で陸前高田のショッパイ水問題も解決。極東地域でただ一カ所の高層気象観測ロケット打上げも今月初めの開所式以後順調にすすみ、三十キロ以上の高層に大気球を上げて太陽からのガンマ線や宇宙塵など宇宙のナゾにとりくむ東大宇宙航空研の三陸気球観測所も着工。肉牛生産公社の外山牧場ではヘリコプターで播種する牧野造成が注目をあびるなど、明るいニュースがいっぱい。

九月　話題の筆頭は夏季国体の爆発的な盛り上りと予期以上の大成功。ボートの総合優勝で天皇杯得点十点を獲得したのをはじめ、ヨット、競泳、水球などの活躍めざましく、加えて県民の誠実な歓迎と支援が好評だった。折しも、十八日から始まった駒ケ岳の噴火が、国体成功の気勢をあげるノロシのように興をそえていた。県過疎地域振興計画もまとまり、こんご五カ年間に百五十二億円を投じて道路整備や学校統合などを進める方向が明らかにされた。また県公害対策本部がスタートし、明年四月発足予定の公害課に先がけ、情報収集や各機関との連絡協調にのりだした。県などが出資し八幡平温泉会社も新発足し松川地熱発電の余熱を利用して一大温泉観光地づくりをめざすこととなった。またこの松尾村金沢地区に東北で初めての中小企業レクリエーションセンターも、総工費六億円、明年九月完成めざして着工になった。冬も通れる国道めざして46号線は、仙岩峠に二千五百メートル余の主トンネルのほか八本のトンネルを掘削して新ルートをひらくこととなり月末に着工。また農政面では県の第二次農業基本計画策定

へ移った昭和三十五年春以来のことである。

きいたところでも、いろいろの批判もあり意見もあるよ

によって新しい方向が明らかとなり、一方生産調整下の稲作は作況指数一〇八と単位収量で史上最高、収量では昨年に次ぐ大豊作となった。

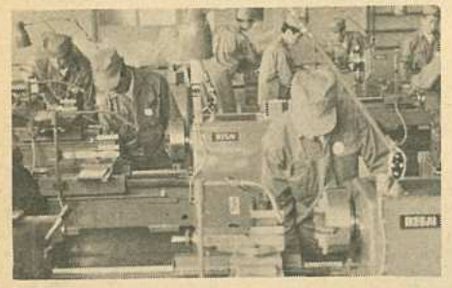
天気も〝協力〟した岩手国体

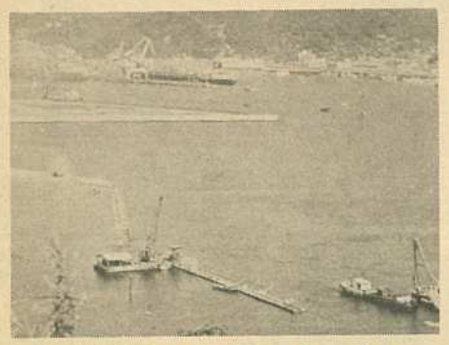
十月　県民の目と耳はすべて国体に集中された。国体関連道路の改良舗装工事は、文字どおり連日不眠不休の大奮闘がつづいた。天皇・皇后両陛下御来県の九日は雨だった。国体選手のゆきかう前夜祭のにぎわいもぬれた舗道に冷たく映っていた。十日の早朝、開会式実施を告げる煙火は上った。雨具を持参し祈るような気持ち、不安な目ざしで曇り空を見つめる観衆は、それでも開門と同時にドッと会場になだれこんだ。やがて場内演技がくりひろげられる頃〝異変〟が起きた。天気予報はみごとに外れ、太陽が顔を出し、岩手山もベールをとったのだ。夏の国体も好天だった。あとで開いた全国身障者スポーツ大会もそうだった。この日のためにひたむきに精進してきた百四十万県民の熱意に、天もこたえたかのようだった。開会式はもとより、全競技ともスムースな運営が好評だった。それにも増して県民ひとり一人の暖かい心のこもったもてなしが、選手たちの心をなごませ、誠実国体岩手の評価を動かないものにした。そして悲願の天皇杯も獲得。県民に感激の嵐をよんだ。余勢をかって、全国身障者スポーツ大会でも県勢は、目標の五十個を大きく上まわる六十五個のメダルを獲得。「やればできる」の自信を得た功績は大きい。

国体一色にぬりつぶされた十月だったが、一方では七年ごし五十三億円を投じた和賀中部開拓建設事業が完工。国体記念事業として期待の文化の殿堂、県民会館の基本設計がまとまり、釜石湾の水質汚染防止策がとられ、二億三千六百万円を投じた農免林道小田越線長野峠線が完工するなど、幅広い事業へのとりくみがみられた。

輸出、昨年同期の六〇％増

十一月　釜石では港湾づくりの先陣をきって公共ふ頭が竣工年度末完成予定の大平地区の竣工を待たずに早くも石油五社の基地づくりも内定。またコンビナートづくりの進んでいた大船渡木工団地も十社十一工場が出そろって全面操業をはじめた。明年五月十日に常陸宮殿下御夫妻をお迎えして行なわれる第25回全国野鳥保護のつどい実行委員会も発足、滝沢村の県きじ養殖場に建設中の鳥獣保護センターもほぼ完成し、受入れ準備は着々進んでいる。北上川特定地域の開発計画にもとづいて十年来すすめられてきた猿ケ石南部土地改良事業も完工。田瀬ダムの水が千八百ヘクタールの原野を沃野に変えた。また畜産五百億円達成推進の運動本部が設けられ、畜産岩手の地歩をよりいっそう高めてゆくこととなった。誘致企業の増加を反映して、本県の輸出（上半期）が昨年より六〇・四％もふえたのも明るい話題。貿易振興の熱意が実を結んできた。駒ケ岳の噴火以来、地震予知が関心を集めていたが十二日、遠野で東北大学の北上地震観測所（遠野市）と三陸地殻変動観測所（三陸町）の落成式が行なわれ、群列観測所としては世界最大といわれるだけに地震観測に威力を発揮するものと期待を寄せられた。





新施設の誕生も明るい話題（上：消費生活センター、中：専修職業訓練校、公共ふ頭）